

農村婦人の貧血調査から

婦中町農協婦人部音川支部

支部長 坂 田 ひ ろ 子

明るい家庭づくりの根元である健康を守る活動を片時もおろそかにしてはならないと、食生活改善や、衣食住の改善、検診活動、農民体操普及、食品公害や環境整備などにとりくんできました。農協合併を契機に昭和42年より毎年1回農協で検診が実施され、検診活動も一層充実してきました。昭和45年には高血圧要注意者が町の検診で45%もあらわれ、食生活・住宅改善の徹底運動をすすめ22%にまで校下ぐるみの活動で下げることが出来、健康への関心の高まりを見たが、農業をめぐる諸情勢はきびしく部員は競って農外就労へ走り、農作業と家庭管理と職場とのはげしい生活を繰り返し、自らの健康を省りみる間もなくあわただしく過ごすようになりました。

かかるとき、県農協では「農村から献血にも適さないようなうすい血を追放します」を決議し、農村婦人の8割までが何等かの農婦症をしめしている現状を訴え、部員の健康管理意識の啓蒙を強くはかることが申し合わされました。この声に県農村医学研究会に於て「農村婦人のうすい血の調査を昭和47年度より3ヶ年にわたって研究する」ことがきまり、はからずも初年度の調査地区に当支部が入りました。

まず部員の方達に農村婦人の健康状態の現情及び、健康の正しい科学的判断の出来るこの調査の内容を説明し、調査希望者をつのったところ予定の50名を上廻る56名の希望者となり、田植えを終えたばかりの昭和47年6月

6日調査を実施していただきました。

調査の結果低色素性貧血者73.2%という数字があらわれ驚きました。要注意の警告を受けた方は23名で、このうち「よくもこの身体で頑張ったもの、もう少し私の方へ来るのが遅れたら貴女は大変なことになったのですよ。」と医師の診断にびっくり仰天した部員の発言は、健康自信型・がまん型の要注意者の心をうごかし、指導員や保健婦に不安をもらすようになり、すすめられるままに医師を尋ねて確かめるようになりました。第二年度調査が行われる時まで貧血者をなくしようのかけ声で婦人部では、学習や講習、ニラやほうれん草の栽培推進、レバーの食べ方の研究と普及などの貧血対策にとりくんだところ、自らの身体で、仲間の身体で試したこの真実の調査は管内の人々の心を動かし以前にも増した熱心な部員の参加が得られました。

第二年度の調査は貧血者の多かった地区が選ばれ、年2回調査が行なわれることとなりました。特に今回は貧血原因追求のため食事調査も併せて実施することになり、調査前の2日間の食事を詳細に記録しました。昭和48年6月19日第二年度第1回の貧血調査の結果は低色素貧血者57.1%と前回は下廻ることが出来ました。食事調査からは食品摂取量の強いかたよりが見られ、有色野菜は特に不足し、牛乳、卵などの良質蛋白のとり方が少ないことがわかりました。部員の中には肉や魚、練製品や即席物に多くの金をかけ、お金を出し

て買ったものには栄養がたっぷりあるような錯覚も多く、手間のかかる自家野菜を敬遠し、バランスのとれた食事のとり方には考えのずれが目立ったので、生活指導員の指導で献立研究を行い改善につとめ、食品の供給に当っては共同購入をするなどいろいろすすめています。

新年度の婦人部活動として、有色野菜の年間栽培の指導と実践、中でもニラの普及、ブロッコリーの共同育苗による全部員への普及をはかるなど考えています。幸いかねて婦人部念願の料理室がこの三月増築されたので、年間通じた料理教室の開催で、調理技術の向上をすすめ、うすい血の追放に一層成果を上げるつもりでいます。

顧りみれば、第1回目の調査は、他機関よりの親切心で役員の知らない間に行われた食事のきき取り調査が、腹をすかして調査班を待ちくたびれていた受検者の心理を刺激し、

「試験台にのせられた」とか「mana板に……」という予期しなかった苦情の言葉におろおろさせられ、打消しに思わぬ手間をかけるという難しいときもありましたが、この調査とは関係のなかったことがわかった今、受検者全員、自分の身体を知る事が出来た事に喜びを感じております。ここに至るまで婦人部長、生活指導員、農協支所長始め婦人部事務担当者の方々、そして又誰よりもこの調査を成功させたいと願う婦人部役員の努力のたまものと考えます。

今私達は第二年度第2回目の結果の統計を心待ちにし乍ら、第三年度には調査者全員落伍せず受検し、富山県農村医学研究会の貴重なこの調査を成功させ農村婦人の健康守りに貢献したいと願うものです。そして第三年度こそ低色素性貧血者0%実現に大きな夢をかがげて頑張っております。